厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業

平成１８年度　分担研究報告書

乳がん手術前後における患者の生活障害と支援モデルに関する研究

分担研究者　柿川　房子　新潟県立看護大学○○教授

研究要旨

がんの出現時期から告知を受け、手術や化学療法などの治療を継続する乳がん患者の生活障害の現状と、その支援パスの有効性と支援のあり方の指標となるツールを開発することを目的に、WHO 生活障害枠組みと、がんの出現時期から治療の継続、経過観察中のマトリックスによる支援パスを活用して、情報提供と共に、半構成的質問紙による乳がん患者 31 名の生活障害の現状と、そのニーズについて面接調査をし、逐語録等、質的に分析した。

「活動の制約」での情報の活用が減少しているが、約７割が自分が持っている不安の内容が具体的になり、６割近くが不安を軽減するための意義として情報を受け止めていた。

A．研究目的

がんの出現時期から告知を受け、手術や化学療法などの治療を継続する乳がん患者の生活障害の現状を知り、WHO 生活障害枠組み（①機能構造②活動の制約③参加の制限④心理変化⑤支援⑥資源）の視点で構成した支援パスを使用し、有効性と支援のあり方について検討し、身体・精神面へのケアの充実のために指標となるツールを開発する。

B．研究方法

対象：N がん専門病院通院中で研究の趣旨に同意を得られた乳がん患者

WHO 生活障害枠組みをタテ軸に、ﾖｺ軸は①告知後②初回治療（術前化学療法、手術）③退院後家庭生活（病理結果説明時）④社会生活（治療中および経過観察中）のマトリックスの支援パスを提示し、半構成的質問紙による面接を実施した。

質問紙及び逐語録について、質的に分析した。

（倫理面への配慮）

該当施設倫理委員会-乳がんの告知後、治療過程にある患者で研究調査依頼に同意を得られた患者、同時に中止あるいは拒絶によるいかなる障害をこうむらないことの説明をした。

C．研究結果

1)「活動の制約」に関する活用が少ない。2)「心理変化」の「精神機能・ストレス」、「支援」「資源」が共に多いのは質問紙では、７４％が自分が持っている不安の内容が具体的にわかった、５７％が不安を軽減するための情報が得られたと応えた。さらに７４％が自分の持っている不安の内容が具体的に理解できた、５７％が不安を軽減するための情報が得られていた。

D．考察

生活障害枠組では、1)「活動の制約」に関する支援が、乳房温存手術の増加、腋窩郭清術の省略化により日常生活への身体的な影響が少ないと思われる。2)「心理変化」の「精神機能・ストレス」の欄の活用が多いのは、がんに罹患したことによるストレスと経過観察が長期にわたる不安として、「支援」「資源」の欄の活用が共に、疾患に対する情報のニーズの強さと考えた。

支援パスを提示について、不安の内容が明確になり、このことが逆に軽減に繋がっていたようである。特別に不安が強くなる要因としてより、情報提供の重要な資源と考えた。

E．結論

1)「活動の制約」が活用が減少傾向で、「心理変化」「支援」「資源」に関する活用が多くニーズが高い。２）支援パスの使用は治療過程における患者の不安の軽減と情報提供に有効である。

F．健康危険情報

G．研究発表

１．論文発表

なし

２．学会発表
①浅野昌彦、柿川房子、石原明子、長谷川敏彦、市民参加による医療計画策定手法の研究、日本衛生学雑誌、第61巻第2号p.262　. 2006

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）
１．特許の取得
なし
２．実用新案登録
なし
３．その他
なし

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業

平成１８年度　分担研究報告書

分担課題名　患者図書館を活用した医療情報提供のあり方に関する研究

分担研究者　廣瀬弥生　　施設名　静岡県立静岡がんセンター　職名　副主任

研究要旨
患者図書館において、より良い医療情報を提供していくには、図書館のコンテンツを充実していく他に、情報提供の手法が大切と考える。それには、年齢を問わず、利用しやすく、わかりやすいということが、キーワードになると考え、今回、静岡がんセンターの職員が講師となった講演会・講座をビデオ収録、編集し、貸出しやビデオ学習会の開催といった、ビデオによる情報提供を行ったので、その結果を報告する。

A．研究目的

利用者にわかりやく、利用しやすい医療情報提供の方法について検討していく。

B．研究方法

静岡がんセンターの職員が講師となった講演会や講座をビデオ収録・編集し、図書館や専門外来での貸出し、ビデオによる学習会を実施。

（倫理面への配慮）

担当講師に、ビデオの作成目的、後利用の仕方について予め、御了承いただいた。なお、今回、図書館利用者、学習会参加者の個人的なデータは使用していない。

C．研究結果

ビデオ貸出（専門外来設置分は除く）

2006 年度（4/1～3/27）総数 509
（タイトル総数 83）

2005 年度　総数 84　（タイトル総数 69）

ビデオ学習会

肺がん 11 週 54 日間　参加者数 212 人
胃がん 6 週 29 日間　参加者数 106 人
乳がん 2 週 10 日間　参加者数 73 人
総参加者数 391 人

D．考察

単純に数字だけを比べただけでは、ビデオによる情報提供は、わかりやすく、利用しやすい手法とは断言できないが、学習会では、「わかりやすい。」「助かる。」との参加者からの感想も寄せられ、貸出回数も伸びていることから、本や雑誌、インターネットによる提供方法と同様に有効な方法の１つと考える。当院職員が講師を務めていることから、利用者には診察・治療後の確認または事前学習となり、提供者としては、情報内容の質に関して、当院で実際に患者・家族に説明、実施している内容なので、安心して提供できることは心強く感じる。実際、ビデオ学習会を行っている診療科の医師からは、「患者さんにビデオを見たと話される。」「セカンドオピニオンの受診者には事前に視ていてほしい。」との話も伺うことがある。今後は、各診療科との連携を強化していくことと同時に、臓器別の資料のコンテンツを充実させ、より効果的な提供方法を検討していくこと、内容の更新については、本・雑誌、インターネットに比べ、容易ではないことが難点であるので、それをカバーしていく方法が課題であると考える。

E．結論

ビデオは視覚・聴覚にうったえるので、わかりやすい資料であり、その提供方法は利用者に受け入れられたと考える。

F．研究発表

１．論文発表
実績なし。

２．学会発表
実績なし。

G．知的財産権の出願・登録状況

１．特許の取得
なし。

２．実用新案登録
なし。

３．その他
なし。

厚生労働科学研究費補助金　がん臨床研究事業

平成１８年度　分担研究報告書

がん患者・家族に対する長期の生活支援に関する研究

分担研究者　北村　有子　静岡県立静岡がんセンター　技師

研究要旨

本研究では、療養経過に即した支援について検討することを目的として、経時別に患者の悩みや負担を整理し、分析した。2003 年に実施された全国がん体験者 7885 人の悩み実態調査結果のデータベースを使用し、「診断・治療」674 件のデータを分析対象とした。

個々の悩みについて、文脈単位で抽出した意味内容の類似したものを集めて分類した結果、時期別の悩みの特徴として、《治療法決定時》は、治療に関する情報不足や意思決定の難しさが推察された。《治療開始まで》は、“これからの治療”とひとくくりにして伝える傾向があった。《治療開始後》は、個々の状況によって様々な内容で、過去と現在、そして将来の 3 時点の悩みや不安が混在していた。

患者が求める情報は、セカンドオピニオンが適している医療情報であることが多い。他方、問題の整理がついていない患者・家族には、相談という方法が適していると考える。適切な資源（人や物など）と提供できる内容を対照させて整理し、早期の適切な時期に、問題整理や情報提供、心理的サポートを行う必要があると考える。

A．研究目的

生存率の向上により、初回治療後、長期に生活する人々は、機能障害、再発・転移の不安などを抱え、複数回の治療経験をもつ場合もある。このようながん患者・家族に対して、療養経過や時期に応じた長期の生活支援が必要である。

本研究では、療養経過に即した支援について検討することを目的として、経時別に患者の悩みや負担を整理し、分析した。これは、がん患者の心のケア及び医療相談のあり方を検討する際の基礎資料になると考える。

B．研究方法

2003 年に実施された全国がん体験者 7885 人の悩み実態調査結果のデータベースを使用した。このデータベースには、静岡分類(大分類 15 項目と中・小・細分類から構成)を用いて、2 万数千件に及ぶ患者の悩みや負担が分類されている。本研究では、大分類「診断・治療」(770 件のうち検査に関する内容を除外した 674 件)を分析対象とした。「診断・治療」を選択した理由は、患者・家族の生活において病状変化や治療の影響が大きいことが調査結果や相談窓口に寄せられる内容にあらわれており、また、がん情報として特に疾病や治療に関することが求められているからである。

静岡分類を基に、研究者 2 名が、個々の悩みについて、文脈単位で抽出した意味内容の類似したものを集めて分類した。経過時期別に区分し、悩みの分類内容を表現している名称をつけた。このとき、類似したものがない場合は「その他」とした。

（倫理面への配慮）

調査結果はデータベース化される過程で、個人情報及び医療機関が特定されるような内容について削除されている。

C．研究結果

経過時期の区分については、データベースにある時期別情報(診断時、診断から現在、現在の 3 時点)と、個々の悩みの文脈から判断し、《治療決定時》《治療開始まで》《治療開始後》に分類した。《治療開始後》については、さらに《前体験による治療のためらい》(33 件)、《その他の治療(民間療法・後遺症等)》(47 件)に分類できた。

また、患者の記述には、対処法が考えられる「悩みや問題」と、不安など心理面をあらわす「思い」があることが見出せた。

《治療法決定時》(165 件)の詳細は、【治療選択の迷い】(117 件)、【情報・知識不足のため治療選択が難しい 】(19 件)などであった。

《治療開始まで》(186 件)は、【これからの治療に関する気がかり】 (112 件)が多く、“これからの治療”“治療の内容、効果がどうなのか”という表現が多くを占めていた。

《治療開始後》(235 件)は、【受けた治療が正しかったか】(38 件)、【治療がつらい】(36 件)、【今後の治療に関する気がかり】(36 件)などであった。その内容は、症状・副作用・後遺症、入院・退院・転院とも関連があった。

D．考察

経過時期によって、患者・家族の悩みや負担は変化し、《治療法決定時》には、治療に関する情報不足や意思決定の難しさが推察された。

《治療開始まで》は、漠然とした記述内容で、患者にいくつかの疑問があったとしても他者に伝える際には、“これからの治療”とひとくくりにする傾向があると考えられる。

《治療開始後》は、治療継続中あるいは経過観察など個々の状況によって様々な内容で、過去と現在、そして将来の 3 時点の悩みや不安が混在していた。また体験に基づいて、多様な表現がみられた。

経時的に分析することで、時期別の悩みの特徴と、患者が抱いている悩みには過去の疑問や将来の不確かさが影響していることが明らかになった。

患者が求める情報は、一般的な内容とともに、自分自身に適応されるのかという専門医の判断が必要な医療情報であることが多い。この場合は、セカンドオピニオンが適していると考える。他方、情報の収集や解釈に混乱している患者・家族に対しては、一緒に問題を整理する、つまり相談という方法が適していると考える。相談のなかで、必要な情報を得て、不安などのこころの問題を軽減することができる。

適切な資源（人や物など）と提供できる内容を対照させて整理し、早期の適切な時期に、問題整理や情報提供、心理的サポートを行う必要があると考える。そして、情報提供の場合には、内容の根拠や、事象がすべての人に当てはまるわけではないこと（割合）を明示する必要があると考える。

研究の限界として、調査はそれぞれの時点にさかのぼって回答を求めているため、その当時と多少の相違がある可能性がある。また記述回答であり、会話に比べて表現に制限が生じていると考えられる。

E．結論

時期別の悩みの特徴として、《治療法決定時》は、治療に関する情報不足や意思決定の難しさが推察された。《治療開始まで》は、“これからの治療”とひとくくりにして伝える傾向があった。《治療開始後》は、個々の状況によって様々な内容で、過去と現在、そして将来の 3 時点の悩みや不安が混在していた。

早期の適切な時期に、問題整理や情報提供、心理的サポートを行う必要がある。そのためには、適切な資源（人や物など）と提供できる内容を対照させて整理する必要があり、今後検討していきたい。

F．研究発表

1．論文発表

Yamaguchi, K., Kitamura, Y., et al., Cancer Patients' Distresses and Inquiries — Proposal of Four-level Classification Based on Consultation Service and Questionnaire Survey, Cancer Science, 98:612-616, 2006.

2．学会発表

なし

G．知的財産権の出願・登録状況

1．特許の取得

発明の名称　類似文章検索プログラム
出願番号　特願２００７－４６９２６
出願日　平成１９年２月２７日

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし

別紙

研究成果の刊行に関する一覧表【平成18年度】

書籍：日本語

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
山口建、他	抗がん剤治療・放射線治療と食事編	「がんの社会学」に関する合同研究班	がんよろず相談第３集「抗がん剤治療・放射線治療と食事編」		静岡	2007	
磯部宏	肺癌のセカンドオピニオン外来	工藤翔二	呼吸器診療のコツと落とし穴、③びまん性肺疾患・肺腫瘍	中山書店	東京	2006	255
光山昌珠	乳癌診療におけるインフォームド・コンセント１．患者への説明	飯野佑一 園尾博司	よくわかる乳癌のすべて	永井書店	大阪	2006	439-446
大野真司、大島彰	チーム医療	飯野佑一 園尾博司	よくわかる乳癌のすべて	永井書店	大阪	2006	475- 480
大倉久直	シアリルルイスＡ抗原	Medical Practice 編集委員会	臨床検査ガイ2007-2008	文光堂	東京	2007	868-872
大倉久直	腫瘍・繊維化マーカー	高久文麿	臨床検査データーブック	医学書院	東京	2007	588-612
宮城洋平、山下浩介、他	わかりやすい腫瘍マーカー	かながわ・がんQOL研究会	わかりやすい腫瘍マーカー	かながわ・がんQOL研究会	神奈川	2006	1-32
今井聡美、山下浩介、他	ガンのセカンドオピニオンをとるコツ（第２版）	セカンドオピニオン・ネットワーク	ガンのセカンドオピニオンをとるコツ（第２版）	セカンドオピニオン・ネットワーク	東京	2007	1-24
小池眞規子、栗原幸恵	病院	日本カウンセリング学会	認定カウンセラーの資格と仕事	金子書房	東京	2006	72-77
小池眞規子	がんを知って歩む会ファシリテーター研修	三木浩司	死をみるこころ生を聴くこころⅡ	木星社	福岡	2006	107-115
小池眞規子	リラクセーションと臨床の実際	日本死の臨床研究会	死の臨床とコミュニケーション	人間と歴史社	東京	2007	37-40

別紙

研究成果の刊行に関する一覧表【平成18年度】

雑誌：外国語

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Yamaguchi K, Ishikawa M, et al.,	Cancer patients' distress and inquiries : proposal of four-level classification based on consultation service and questionnaire survey.	Cancer Science	98	612-616	2006
Yano T, et al	Is oxygen supplementation needed after standard pulmonary resection for primary lung cancer?	Ann Thorac Cardiovasc Surg	12	393-396	2006
Okamoto N, Yano T, et al	5-year survival rates for primary cancer sites at cancer-treatment-oriented hospital in Japan.	Asian Pacific J Cancer Prev	7	46-50	2006
Yoshino I, Yano T, et al	Clinical characterization of node-negative lung adenocarcinoma: Results of a prospective investigation.	J Thorac Oncol	1	825-831	2006
Hagiwara K, Nagai H, et al.	Frequent DNA methylation but no mutation of *ID4* gene in malignant lymohoma.	J Clin Exp Hematopathol			in press
Ohno T, Nagai H, et al.	Loss of 06-methylguanine-DNA methyltransferase protein expression is a favorable prognostic marker in diffuse large B-cell lymphoma.	Int J Hematol	83	341-347	2006
Tabuchi T, Nagai H, et al.	A case of myelofibrosis with myeloid metaplasia with $JAK2^{V617F}$ mutation who developed fibrous tumours in multiple organ.	Eur J Haematol	77	264-266	2006
Li Y, Nagai H, et al.	Aberrant DNA demethylation in promoter region and aberrant expression of mRNA of PAX4 gene in hematologic malignancies.	Leuk Res	30	1547-1553	2006

別紙

研究成果の刊行に関する一覧表【平成18年度】

Okamot N, Yamashita K, et al	5-year survival rate for primary cancer site at cancer-treatment-oriented hospitals in Japan	Asian Pacific J Cancer Prev	7	46-50	2006

雑誌：日本語

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
飯田信世、江上格	外来癌化学療法における皮下埋込型中心静脈ポートの有用性と留置手段のコツ	癌と化学療法	33	639-643	2006
松谷毅、江上格	切除不能肝・大動脈周囲リンパ節転移巣を伴った大腸癌に対し原発巣切除後にTS-1/CPT-11併用療法が有効であった1例	癌と化学療法	33	1337-1340	2006
長濱正吉、土屋嘉昭、他	膵頭十二指腸切除後の膵空腸吻合部感染症例の検討	日本外科感染症学会	3	491-494	2006
佐々木常雄、笹子三津留、島田安博、他	抗がん剤適正使用ガイドラインNo.3　胃がん、肝がん	Int J Clin Oncol	11	1341-9625	2006
佐々木常雄	がん化学療法のベストケア	エキスパートナース	2006.11 臨時増刊号	1-146	2006
永井宏和	治癒可能な血液腫瘍―びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫―	Medicina	43	1139-1142	2006
菊地惇	がん患者の疼痛対策と家庭医のかかわり	実験治療	681	108 -112	2006
木村秀幸	院内緩和ケアチームの現状と問題点	緩和医療研究会	14	37-52	2007
長井吉清 冨田きよ子 瀬戸山修	主要3癌のステージ別ベースラインQOL	日本癌治療学会	41	898	2006
平山功、阿部鋭子	癌性心膜炎	看護技術	53		2007

別紙

研究成果の刊行に関する一覧表【平成18年度】

大倉久直	腫瘍マーカーの半減期	Medical Technology	34	753-758	2006
堀光雄、大倉久直	腫瘍マーカー検査の将来展望と適切な活用の仕方	検査と技術	34	1027-1032	2006
吉田光、野口和典	腹水　－低アルブミン血症を如何に改善させるか？如何なる症例が改善するか？－	肝胆膵	54	93-101	2007
井上賢一	乳がんの外来化学療法と在宅医療の現状と将来	癌と化学療法	33	595-598	2006
甲斐敏弘、井上賢一	多施設臨床研究と NPO 法人 NPO 法人乳がん臨床研究グループ(SBCCSG)の試み	癌の臨床	52	463-469	2006
小池眞規子	親との死別を経験するとき	臨床心理学	6	466-470	2006
小池眞規子、松島英介	がん患者のためのサポート・プログラム	精神科	19	430-434	2006
小池眞規子、渋谷昌三、藤巻貴之	リラックス感尺度作成の試み－大学生を対象として－	目白大学心理学研究	3		印刷中
浅野昌彦、柿川房子、他	市民参加による医療計画策定手法の研究	日本衛生学会	61	262	2006